■謝辞
本研究は、静岡県立大学平成29年度「地（知）の拠点整備事業（大学ＣＯＣ事業）」地域を志向した研究「人と人とのつながりは社会活動にどのような影響を与えるか？」の助成を受けて実施しました。
ここに厚く感謝いたします。

■研究チーム
津富　宏　（静岡県立大学国際関係学部・教授）
副島　里美（静岡県立大学短期大学部子ども学科・准教授）
後藤　隆昭（静岡県立大学言語コミュニケーション研究センター・特任講師）
東　　宏乃（静岡県立大学「ふじのくに」みらい共育センター・地域連携コーディネーター）

■インタビューおよびテープ起こしの協力者
日野聡子さん、勝又俊一郎さん、田島美智子さん、美和千里さん

■挿し絵・デザイン：杉本恵子

■連絡先：津富研究室　E-mail：tsutomi@u-shizuoka-ken.ac.jp

■発行：2018年3月31日

地域で社会活動を始めるための8つのレシピ

ー牧之原の市民から学んだこと

レシピ1　声をかけられたら参加してみよう！
レシピ2　一緒に活動したいと思う人と始めよう！
レシピ3　世代や考え方、立場を超えて、つながろう！
レシピ4　「“まち”を良くしたい」という思いが第一歩。
レシピ5　自分の思いを大切にしよう！
レシピ6　楽しんで活動しよう！
レシピ7　まずは、できる範囲から始めよう！
レシピ8　次世代を大切にしよう！

【制作】
静岡県立大学　H29 年度　地域志向研究　研究チーム
「人と人とのつながりは社会活動への参加にどのような影響を与えるか？」

この『８つのレシピ』は、静岡県牧之原市の社会活動のキーパーソン6人のインタビューのエッセンスをまとめたものです。私たちは、どのようにして、この６人の方々にたどりついたのでしょうか？　それは、2017年12月7日におこなったワークショップ、「人と人とのつながりは社会活動にどのような影響を与えるか？」からです。

「社会活動」とは「人々が自主的に集まって行う市民としての活動」で、文化、環境、福祉、産業など、本当にさまざまな活動が含まれます。

6人の方々のお名前は、このワークショップに参加してくださった30名の市民の方が、「ご自分の社会活動に影響を与えた方」として教えてくださったのです。

静岡県公立大学法人 静岡県立大学 UNIVERSITY OF SHIZUOKA　cocora COC UNIVERSITY OF SHIZUOKA

レシピ
1

声をかけられたら参加してみよう！

①ボランティアどう？と声をかけられたら、まず、謙虚に手伝おう！

②生協の組合員活動でも、PTAでも、ちょっと勇気を出してやってみよう！

③自分の地域の外での研修や活動に参加すると、チャンスが広がります。

地域には、いろいろな集まりがあります。ＰＴＡ、生協、商工会、青年会議所、婦人会、消防団などなど。ほんとうにたくさんありますね。こうした集まりに加わることが、あなたの地域デビューです。「声をかけられたら、やってみる」「ちょっと勇気を出して参加する」。そうすると、いろいろなすてきな人に出会えたり、地域の課題に気づけたりします。「誘われたらやってみる」。地域への扉は、もう開かれています。

レシピ
2

一緒に活動したいと思う人と始めよう！

①気の合う人や好きな人と関わり合いを持ちたいという気持ちが出発点。

②行動力、人を巻き込む力、発信する力のある人とつながって行こう！

「この人と一緒に活動したいなぁ」、「キラキラ輝いているあの人と一緒にやりたいなあ」。そんな気持ちが、活動の始まりです。「幼稚園の頃と同じで一緒に手を繋ぎたい人と繋ぎたい」。こんな素直な気持ちが始まりです。「牧之原にも、子どもの遊び場がほしいなあ」。こんなまっすぐな思いが出発点です。身の回りにいる、元気な人、人を誘うのが上手な人、情報を伝えるのが上手な人。いろんな人とつながっていくことで、活動に勢いがつきます。

レシピ
3

世代や考え方、立場を超えて、つながろう！

①性別、年齢、職業、考え方等を越えて、色々な人と話してみよう、つながってみよう。

②一緒に考え、話し、動く。まずは、一緒になってやってみることが大事。

いつも一緒に過ごしている人たちや同じ考え方の人たちだけでなくて、いろいろな人とつながってみると、思ってもいなかった考え方や人に出会えるかもしれません。それはきっと、あなた自身やあなたのチームにとって、困り事を解決するヒントになったり、新たな知恵を得たり、背中を押してくれたりします。また、つながった人たちと一緒に、力を合わせて、話して、行動してみると、だんだんと、素敵な仲間が集まってきます。

レシピ
4

「“まち”を良くしたい」という思いが第一歩。

①自分の子どもだけでなく、地域の子どものために活動したいのです。

②企業人や商売人でも、地域への純粋な思いで、つながることができます。

地域で活動すると「浮いてしまうのではないか」という心配が出てきます。しかし、「自分の子どもだけではなく、地域の子どものために活動したい」という純粋な気持ち、「商売や利害関係があっても、地域のために役立ちたい」というまっすぐな思いがあれば、周囲は理解してくれます。「出る杭は打たれるけど、出すぎた杭は打たれません」。

レシピ
5

自分の思いを大切にしよう！

①「地域を良くしたい」「とにかく楽しい」…全ては、「私はこう思う」から、始まります。

②活動する上で出会った「支えとなる思い」や「気持ちよく活動するための工夫」も大切にしていきましょう。

自分の思いを大切にしましょう。「地域を良くしたい」「好きだからやりたい」といった、自分にとって率直な思いが大切です。さらに、活動をしているうち生まれてくる、「相手の顔を見て腹を割って話す」、「多少の大変なことは当たり前」、「継続は力なり」、「組織内の立場を地域のために活かそう」といった信念があなたの支えになります。

レシピ
6

楽しんで活動しよう！

①楽しんで活動していれば、人は関心をもって覗きに来て、参加してくれます。

②楽しんで活動していれば、家族も理解して、気持ちよく送り出してくれます。

「楽しい」、「うれしい」、「おもしろい」はうまくいっている活動の共通点です。楽しんで活動していると、いろいろな人が関心をもってのぞきに来てくれますし、楽しんで出かけていると、家族なども喜んで送りだしてくれます。活動を頑張ることで得られる「達成感」と「楽しさ」を大切にしましょう。

レシピ
7

まずは、できる範囲から始めよう！

①行政に頼らなくても、最初の一歩が踏み出せるような仕組み作りが大切です。

②（市民が）自分達でやっても良いのだな、と思います。

地域には、みんなで取り組める課題がたくさんあります。こども食堂、ご近所の居場所づくり、図書館の活動、商店街のにぎわいづくり、身近な自然の保護、地域のお祭りなどなど。お役所や補助金の力に頼らずに、最初の一歩を踏み出しましょう。まず、自分たちの力で始めてしまうことが大切です。

レシピ
8

次世代を大切にしよう！

①いわゆる、バカ者・よそ者が思う存分やって、「若者」が原動力となって、地域は動く！

②利害関係を超えて参加できる社会活動は、大切な教育活動でもあります。

新しい風は地域への刺激です。地域づくりの分野でよく言われるように、「バカ者・よそ者」、そして「若者」の活動が地域の原動力となります。彼らの持つ、外からの視点、新しい発想が地域を動かします。若者や大学生、高校生、中学生、そして、小学生が活躍できる地域をつくりましょう。活動を通じて次世代を育て、次世代の活躍を応援することは地域の未来づくりです。

研究の方法について

2017年12月7日、「人と人とのつながりは社会活動にどのような影響を与えるか？」というテーマで、牧之原市で「社会活動」をなさっている市民の方と一緒に、ワークショップを行いました。「社会活動」とは、「人々が自主的に集まって行う市民としての活動」。文化、福祉、産業、環境など幅広い活動が含まれます。

地域のお祭り、図書館の拡充、子どもの居場所、ファシリテーション、国際交流、政治、原発と、多様な社会活動にかかわっておられる、10代から70代の市民30名に、牧之原市全域からご参加いただきました（もっと多くの方にお声がけしたのですが、お忙しく、ご参加いただけなかった方もおられました。）。

ワークショップの初めに、これら多様な参加者がお互いに何かしらのつながりがあることをみつけるアクティビティを行いました。出身集落で集まったり、卒業した高校別に集まったり、好きな色で集まったりと、最後は、知り合い同士手をつないで、1つの輪になり、お互いが親近感を持つまでになりました。

中盤では、各自がワークシートに記入することで、自分の社会活動に影響を与えた人物や出来事をたどりました。

最後には、各自の社会活動に影響を与えた方々のお名前を付箋に書いて、みんなで大きなクラフト紙に貼り付けました。90人の方のお名前が挙がりました。どなたとどなたがお知り合いかなど、参加者同士で意見を出し合いながら結び付けて、これまでに牧之原市の社会活動を支えてきた、人と人のつながりを実感しました。

その後、研究チームで検討し、お名前の挙がった90人の中から、ワークショップ当日2名以上の方からお名前が挙がった方のうち、経験豊富な方6人を牧之原市の社会活動のキーパーソンとして選び、2018年1月にインタビューをさせていただきました。

牧之原市内から、そうそうたるメンバーが集まった。

各自に影響を与えたキーパーソンを挙げていく。

ワークショップにご参加くださった方に感謝して、ここにお名前を記します。

●ワークショップの協力者（敬称略・あいうえお順）：

石井真澄、泉地進吾、植田博巳、大石昌利、大石マリアネラ、大石泰代、大石悠司、大関健吾、片瀬紀子、ガルシンスキー明子、絹村亜佐子、河野研司、今野朝子、澤島千温、柴本俊史、白倉麻里奈、杉本　正、田平陽子、種茂和男、中川松枝、早川和幸、藤田健一郎、堀池　勇、舛谷綾子、松下一二三、三浦敏秀、水嶋みゆき、山本沙也香、横山奈緒美、米山澄佳

牧之原の社会活動のキーパーソン6人のご紹介

横山裕之さん（牧之原市副市長。静岡まきのはらフィルムコミッション・創設メンバー）

ご両親は、お茶農家で、昭和の時代にイチゴ栽培も手掛けた篤農家の一面をもつ。旧相良町役場職員だった４０才代の時に、映画『ウォーターボーイズ』の舞台となる相良中学校のプールをはじめロケ地として撮影を受け入れたことをきっかけに、牧之原市を映画撮影の舞台として売り出すことに成功する。また、「夢‘ｓｃｏｍｅ相良」のメンバーとして活躍する一方、地域住民として萩間地区大寄で地域のお祭りを作ろうと、「大の字焼き」を始めた。行政職員が市民と協働するには、一緒に汗をかくことが、基本中の基本である、と考えている。1957年、旧相良町大寄生まれ。

増田裕志さん（海まで０分の宿「海岸通り」オーナー。まきのはら茶漬け開発者）

祖父母は料亭を経営、ご両親は相良で食堂を開く。高校時代は、三重県にある日生学園第二高校で寮生活を送る。牧之原市商工会青年部の副部長の時に、商工会職員の小塚さんと「ウォーターボイズ・ショー」を相良で行う企画を成功させる。その後、商工会観光サービス部とＪＡハイナンのコラボレーションで、「牧之原の食を考える会」を開催し、「まきのはら茶漬け」の開発を手がける。「どんな結果になっても、失敗はない。」が持論。1965年、袋井市で生まれ、旧相良町須々木で育つ。

渡辺美穂子さん（アカウミガメ保護団体カメハメハ王国ＮＧＯ・女王）

明治時代に祖父が油田の開発のために新潟から旧相良町に移り住む。少女時代はオテンバで、男子と、ザリガニ採りや川で泳ぎ、ドッジボールにいそしむ。1995年に、静岡県の女性海外研修でノルウェーとドイツなどを視察し、自然に親しむ教育の重要性を知り、アカウミガメ保護団体「カメハメハ王国ＮＧＯ」の創設から関わる。「臆せずいろいろなことにチャレンジし、明るく行動すれば目に留めてもらえる。」がモットー。1949年、旧相良町菅ケ谷生まれ。

水嶋みゆきさん（まきのはらし図書館友の会・会長）

就職し千葉県で働いた後、結婚を機に旧相良町の住人に。夫はサラリーマンで、その先祖は田沼城下で海運業を営んでいた。子育ての傍ら、ＰＴＡの役員を皮切りに地域に出るようになり、本の読み聞かせボランティアを続けながら、図書館拡充の活動に携わる。自分の子どもだけでなく、周囲の子どものために何ができないかと考えて、地域活動の輪を広げていった。「（常識は時代と共に変わるが）一つある真実を見極めたい。」が願い。1959年、旧榛原町細江生まれ。

横山奈緒美さん（榛南おやこ劇場・前運営委員長。人形劇団茶問屋ショーゴ・役者）

「わらび座」の島田公演の実行委員会で知り合ったショーゴさん（生業は半農・半人形劇）と結婚して、旧相良町萩間地区大寄に来る。子どもの保育園時代の親同士のつながり、生協の共同購入を通じて、萩間に仲間を増やしていく。西原市長（当時）のブログに刺激を受け、榛南おやこ劇場の運営委員長として、劇場を地域社会と結ぶことに力を入れる。「みんなが喜んでくれることをやって、「ありがとう」、と言われるとうれしい。」が活動の原動力。1959年、島田市生まれ。

片瀬紀子さん（みらい子育てネット牧之原・事務局、児童館職員、学童支援員）

実家は養鰻業。職場結婚で旧榛原町勝俣へ。陸上のコーチをやっていた夫は土・日の不在が多く、「子育ては一人では無理！」と思い知った頃に、生協の活動で知り合った地域の方や、児童館の先生、幼稚園のママ友に助けられる。その後は、読み聞かせボランティアや自主活動のプレイパーク、榛南おやこ劇場等で水の合う仲間と活動を共にし、「みらい子育てネット牧之原」の代表を10年以上務め、現在は事務局長として「できる事をできるところから進めよう！」と、楽しんで活動中。1967年、榛原郡吉田町生まれ。